

文學の體系

園 賴 三

十一

言語藝術としての文學に取つて、言語の呼起す表象作用若くは、言語の表象力の重
要さに就いては、既に了解されたであらうと思ふ。言語が複寫表象として全體の簡
約的表示をなし、意味表象として事柄の意味を傳へ、これによつて吾々に理解を與へ、
想像を呼起すことを吾々は見て來た。

而して吾々は今や更に進んで文學の言葉は、特に感情と密接なる關係にあること
を注意しなければならぬのである。それで、さし當り、表象と感情とのつながりを
フォルケルトに従つて考へてみよう。

言語の表象作用に出會つて、それが何を指し示さうとしてゐるのか、その示さう
とする對象の意味は何かを、吾々が把握することができると、その意味に關聯して吾
々の心の中に感情が湧き上る傾向がある。これは、フォルケルトの謂ふ言語の意味

表象と意味感情に外ならない。

感情には表象をば自己の内容として取り入れてゐるものが多く、表象にも感情を内容に取り入れてゐるものもあり、兩者が最初から絡み合つてゐる状態も尠くはないが、これは別として置いて、單獨に意味表象の過程が踏まれた後、意味感情と特殊な關係を結ぶもののみを就いて伺ふことにする。

と言ふのは、表象と感情とのかうした繋がりが具合の中に、美的態度の本質的な一面が現はれると見るフォルケルトの美學に對しては兎に角、吾々の問題たる文學の言葉の性質を闡明にする上に示唆する處があるからである。

表象と感情との繋がりは、文學の言葉にありては、概して最も著しい親密さを示す状態にあるのである。それは、言葉の意味表象の發生に伴ふて直ちに、感情が現はれる状態にあり、言葉の文學的な取扱ひによつて、感情が意識の中に優勢に活躍する、而して意味表象は、感情を呼出しそれを活躍させるための連鎖たるの役目をつくすのである。

文學の言葉は、併し乍ら總て、かゝる表象と感情との繋りかたを持てるものとのみ、斷定することは能きぬとフォルケルトは考へる。彼は、感情に乏しき表象なるもの

の存在に注意を促し、文學の言葉に於ける表象と感情との特殊なる關係を説いてゐる。

作品に現はれる人物が科學の冷かな觀察や實驗に没頭せる理智的にして感情の冷かな人物であるやうな場合、この對象については直接感情は伴隨しない。フオルケルトはこれを感情に乏しき表象の一つの種類として擧げ、又、自然主義の作品で語られる情味のない乾燥せる言葉や、少しも語勢を加へない平板な事實記載の文體等の如きものを擧げ、第三には、事件の叙述をなすに、たゞの日常事として無頓着な態度を以て臨むものを擧げてゐる。

これら三つの種類若くは場合に於ける表象は、省略的な方法で意味を傳へ、且つその事柄に就いて好奇心を刺撃することなく「コント、ハイグゼ、ハイト判り切つた確かさ」で、讀者の心に這入つて行く。そこには直接的な感情の伴隨はない。然らばかゝる「感情に乏しき表象」は、その感情に乏しきことによつて文學たるの實績を擧げるであらうか。言換へて、感情を呼起すことなしに、言葉は文學となりうるであらうか。

フオルケルトは、この感情に乏しき表象に關連して、次のやうな關係の成立を發見してゐる。即ち、感情に乏しき表象は、直ちに感情を呼起す代りに、他の表象の若干を

呼さます、それは、謂はゞ間接的な意味表象であるが、このものが早速、感情を呼起すのである、従つてこれは、間接的な意味感情である。

例へば吾々が小説を讀んで、前述の科學の探求に没頭して他を顧ざる冷かな人物を、心に思ひ浮べたとする。するとこの感情に乏して表象は、彼の枯淡にして冷徹せる生活や性格により、それに關連して、自己や家族の幸福を犠牲にしてゐる陰慘なる姿、即ち、間接的な意味表象を呼起す。さうして、かゝる事情に關連しき感情が強く呼さまされる。

事情ツァンゲンに關連せる感情として間接的意味感情が現はれる外、今一つは、前掲の感情に乏しき表象の第二第三の場合の如きものに於て、作者その人の懷抱する見解が、作品中に取扱はれる事柄の奥底に潛み、表面に現はれる簡明な散文的な叙述や感情を宿さざる冷き言葉を通して、作品全體を貫く一種の氣分となつて現はれる場合がある。これは藝術的見解グフェーレフンクシオンより發生する感情と見做されるものである。

かくして、文學に於て感情に乏しき表象は、その言葉の外見上感情の乏しきことによつて、結局事情に關連せる感情若くは藝術的見解より發生する感情を誘發し而して、それによつて文學的機能を發揮することになるのである。(Volkelt: System der Aesthetik I.

十二

フォルケルトの説くところに因つて、文學の言葉はその意味するものにに基づき、直接若くは間接に感情を呼びますものであることが明になつた。それで、感情が呼ばれるためには、言葉が何を意味してゐるか、理解せられなければならない、そして、言葉の理解が、この場合では準備條件となつて、感情が誘發されたものであることが察知せられる。言葉は理解されることを自身の存在の根本義としてゐる。即ち、言葉の基本的性質は概念の表示にあり、言葉は先づ第一に認識の目的に使用されるものであつて、言葉の基本態は概念の言葉たる點にある。

文學の言葉は、特に感情と密接なる關係を持つものであることは察せられるが、凡そ文學の言葉とは如何なるものであるか。

文學の言葉は、言葉が開拓され發展して成つたものであることは言ふ迄もないが、それは何れの方面に何物が開拓されたのであるか。その綱領は二つの方面に歸する。即ちその一は、言葉の表象力を開拓し、生を言語表象によつて形成すること、而してその二は、言葉に感情を呼びます力を與へ、生を言語の感情態の上に實現すること

である。

言語表象の運用は想像の手によつて營まれ、これによつてその發展が遂げられ、本形態の各々に於て獨自の世界を形成することは既に吾々の見て來たところである。

日常の言葉は、その意味するところを人に了解させれば事足り、その意味表象は幼稚單純の状態に留まるものである。これと趣を同じくして、言葉の基本態としては概念の言葉が擧げられる。しかし、それは文學の言葉ではなく、文學の言葉が開拓される素地である素材である。

文學の言葉たらしめんには、概念の言葉を開拓し、感情を呼さます力を培養しなければならぬ。これを廣義に解すると、言葉の理解されるいろ／＼の状態、それに應じて感情への繋がりや、種々の方法や状態にてつけるべく、言葉を藝術的に取扱うことが必要と考へられる。

しかし此場合吾々は、さう言ふことは一體爲しうることであるか、若くは、如何にしてそれは可能であるかを調べてみなければならぬ。この問題を解く爲めには、言葉の發現する心理的の過程や基礎を檢するのを捷徑とする。

コーエンの説くところは頗る暗示に富めるものと思はれるから、それを概説しつつ吾々の考察を進めやうと思ふ。意識の原形は運動であつて、運動が意識を産み出すのである。運動のうちでも表現運動は、意識の内容を初めて産み出して、意識に最初の表現を與へるものである。而して此の際、意識内容を分離し又結合する仕事の上に現はれる運動は思惟であつて、思惟は運動として自身を保ち發展するためには言葉が必要とする。言換へれば、言葉は思惟の表現運動である。

認識は思惟であり矢張り運動であるが、コーエンの見る處では、認識思惟の運動は意識の全領域を占領するものではなく、意識の中にこの種の運動のみがあるのではない。そこには、認識思惟の運動よりも一層根元的な運動がある。それは情感フェーレであつて、このものは運動の根元であり、意識そのものゝ根元である。(Cohen: Aesthetik. I. Bd

VI. Kap. §6. Das Denken u. die Sprache)

分離と結合の支持として思惟は、概念の取扱ひをなすものであり、言葉は思惟の表現として概念を表示するものである。従つて、言葉の中には、自から概念が言葉の内容容として包含される性質、及び言葉には、内容的なるものを求める性質があり、それに基づいて言葉は概念の言葉たる性質があることが認められる。しかし、言葉はこの状

態より一步も外に出で得ないものであらうか。コーエンが考へるやうに、思惟は運動であり運動として意識に内容を産出せしめるものであるが、このものが同じく意識を産出する運動たる情感と何らの連絡をも持ち得ないと言ふ理由はない筈である。

共に運動たる思惟と感情とが言葉の上に於て結合する可能性は種々の方面に於て見出されるであらう。コーエンの擧げてゐる、^{デレンクワフ、フエリ}思惟感情は、^{ウルタイリス、グアエリ}判断感情や、^{ベグリス、ステエリ}概念感情として現はれ、判断や認識の如き思惟に於てもその思惟の作用に伴つて感情が呼出されることがある。

思惟感情は、思惟概念とは異なるものであつて、後者の如く意識の固定的内容ではなく、作用に伴隨して發生する流動的なる意識である。思惟感情は、運動としての思惟の作用が始まつた時、それが刺戟となつて、一層根元的なる情感の運動を誘發したものと見られる。

かくして、思惟の表現運動として言葉が現はれると共に、又、そこに、思惟感情の表現運動として言葉の發現も可能となる。さうして、思惟概念と思惟感情との合一を言葉の上に於て遂げうる機會の到來も可能となるのである。このことは又次の事柄

を意味する。言葉の基本態は概念の表示であるが、言葉には語^{ザオルトゲフユール} 感や句^{ザツラゲフユール} 感なるものが伴ひ若くは發生する素地がある。さうして、この概念の語と語感や句感が結び付いて一體となる機會がある。

而してコーエンはかゝる機會の到來せるものを文學であると考へる。彼に従へば、文學は概念と語感との合一であり、第二の内的言語形態^{スプラツハフオム}である。後者に關し、内面^{フ、エルインネ}化を文學の中樞機能と見る彼の見解が有力に現はれてゐる。

第一に現はれる言葉は、概念の言葉である。それは對象を思考し想定するものであり、精神、認識の爲めに内面化を行使するものである。概念の言葉は純粹感情のためには素材に過ぎない。第二の言葉はこの純粹感情の言葉である。

第二の言葉に於て行はれる内面化は、最早や精神を目的とせず、却つてこれを素材に引き下し、その代りに自我を押し立て、自我のために行ふところの真正の内面化である。第二の言葉は第一のそれより一層内面的であり、一層複雑なる任務を帯べるものであつて、概念内容と感情伴隨とが合して一つとなり、この點に於て第一の言葉より、より高きものとなつたのである。

而して、真正の内面化は、内面、美的精神、自己感情を産出するものであるが、かゝる内

面化が行使される「第二の内的言語形態」は、内面となるべき諸々の對象を産出する機關である。(op. Cit. §11. die Poesie als Zweite innere Sprachform.)

十三

吾々は文學の言葉の如何なるものであるかを伺ひ知ることができたが、このことから引いて、言葉が如何にして文學を産出するかと言ふことの或る見地を得ることができると思ふ。言葉が變化しうるものであり、若くは言葉に種類があり様態の別があり、又種別を生せしめ得られるものであることがこゝには前提となつてゐる。

このことから、言葉を巧に取扱ひ言葉に特別な力を養ひ或る雰圍氣を醸し出させる等の工夫や努力も可能となるのであつて、さうした言葉のたくみは言葉の藝術を造り文學をつくり出す大切な役割を持つてゐるものである。

言葉の基本態たる概念の言葉は文學を産出し得ない。言葉が文學を産出しうるのは、言葉が單なる認識のために用ゐられ、概念を表示するだけの状態に於てはない。

概念の言葉が開拓せられ内面世界を打開し展開するやうになつて、即ち、概念の言葉が、真によく内面化せられて、文學を産出しうる状態に達するのである。

概念内容に感情伴隨が結び付き一體となりコーエンの言ふ「第二の内的言語形態」なるものが出來上つて、文學が産出せられるのであるが、言葉が如何にして文學を産出するかと言ふ觀點より、この過程を觀察してみるのに、文學の産出は言語の概念性に基因するのではなく言語の感情性に基因するものであることが明白となる。

概念の言葉より感情の言葉が展開し、この展開に基いて文學が發生するものである。若しも言葉にこの感情を荷ふ素地がないならば文學は生れないであらう。感情の言葉たること、その状態を通じて、文學の世界が結成せられる。言語の感情態に於て、生の實現が成就せられ文學の世界が結成せられるのである。

感情の言葉は文學の母胎であるが、感情の言葉なるものは、概念の言葉が開拓せられそれより發生するものであつて、その間には展開を導く種々の状態や關係の介在するものであり、概念語に語感の結び付く關係も決して簡單なものではなく、感情の言葉も一つの性質や種類に留まるものではなく、状態や種類の別を有するものである。

而してこの感情の言葉の種々の状態や種類、若くは言換へて、言語の種々の感情態に應じて、そこに産出される文學に基本形態の別を生じる。

吾々はフォルケルトの説く言語表象と感情との繋がり方に注意を向けると、文學の言葉は、その意味するものに基づき、直接に感情を呼びます場合と、間接に呼びます場合とがあることを知り、更に、これは文學の言葉として、その感情態が直接的なるものと、間接的なるものとの區別の存在すること、さうしてこの感情態の差別は文學の基本形態の別と密接なる關係を有するものであることを吾々に感知せしめる。吾々は進んで、言語の感情態の如何なる種類が、文學に向つて、基本形態の如何なる種類別を産出するかを考察しやう。これに關連してコーエンが、文學の基本形態の別即ち、文學の種類を産出する原因を何處に見出してゐるかを伺つて置かう。

簡單に言へば、コーエンはその原因を内面化フエルインネリツツングにありと見てゐる。精神や認識のために行はれる内面化もあるが、彼は、眞正の内面化は自我のために行はれ、内面自己感情を産出するものであると見做してゐることは既に吾々の知つた處であるが、文學の種類を生せしめる原因はこの眞正の内面化にあると見てゐるのである。

さうしてこのものは、各種の内容や客體オブジェクトを、自我の内界の爲めに獲得し征服する手段として働くのである。文學の種類は、自我の内界の爲めに、如何に内容や客體を内面化するかによつて生じる。彼はこの内面化の方法に種類別があるものと見てゐる。

る。

十四

第一の内面化は、先づ自然人の状態から個體の限界を擴げ、自然の制限より個體を脱却せしめ、新しき世界たる歴史の世界へ導き入れる。この内面化の働は、やがて特殊化することになり、内面化の特殊化作用として叙述エルテエーレンクが現はれる。叙述は産出する手段であつて、歴史の原形たる事件ベグーベンゲイトを産出する。この種の内面化によつて産出されるのは叙事詩エポスである。

第二の内面化は、孤立せる個體を相互に交渉させ、兩者の間に統一を齎らすやうにとどめる。この際、兩者の交渉に於て、二つの心臓が高鳴り悸動を一つにする。内面化は二つの個性や二つの心の統一に向つて働き、戀となつて現はれ、そこに、生の統一、生の根柢、生の精華を示すであらう。

而して、かゝる内面的な心の經驗は、事件として見られるよりも寧ろ體驗と見られなければならぬ。それは戀の體驗だ。事件は叙述せられるに適はしいものであるが、之に反し、體驗は叙述では充分に現はれないし又それに満足は能きぬ、告白の方法を取らずにはゐられない。かくて、體驗の告白は抒情詩となつて現はれる。これ第

二の内面化が産み出すところの文學の基本形態である。叙事詩なるものには、人間が文化階梯に進み歴史をつくる状態が現はれており、叙事詩そのものは歴史の基本力を所有する。これは、他面に於て、人間の行ふ内面化の最初の働きの結果と見られる。叙事詩は、各文學の類型の原型タイプ、モデルである。叙事詩は基本的なる内面化を表示してゐるものと見られる。

抒情詩にありては、一切が總て内面的世界である。事件その他あらゆる客體オブジェクトは後退し、事柄を傳達すると言ふやうなことは顧みられなくなり、茲に、たゞ告白と言ふことが眼目となり、一人の淋しき人間が、止むにやまれず、端的に告白する。

告白は、傳達とは違つて、この直接性といふ特性を持つてゐる。この場合告白者がその體驗を追感し共感する人と融け合ひ而も一段淨く高まつた純粹自我なるものを産出するのは第二の内面化であつて、それは最も内面的なる内面化である。抒情詩はこの最も内面的なる内面化を表示する。

第三の内面化は、行動の統一を導くものである。行動に關する點に於て、それは多少倫理的意味を持つものであつて、行動の統一は、行動する主體が、權利主體若くは道德的個人として行動を導いてゐることを示すものである。

しかし、この行動の道德的統一は、行動の全部に行き渡ることはできないのである。行動は悉くこの圈内に統制されてゐるものではない。が、行動の道德的統一は、謂はば行動の豫備條件なのである。行動は、これより益々複雑化し行く傾向がある。

而もこの複雑化せる行動をば、豫備條件としての道德的統一より、更に進んだ状態に於て統一するものがある。これ内面化の高き状態より生ずるものである。かくして、行動は一層進んだ状態に於て統一され美的行動の性質を帯びるやうになる。この種の行動によつて成立する世界は戯曲である。

舞臺の上に現はれる行動は、美的行動であつて、複雑なる行動が道德的統一よりも高き立場に於て統一されたものであつて、純粹感情の對象となる。

さうして、行動そのものゝ統一は、更に、舞臺と観客席との間を結び付け、舞臺上の行動と観客とは結び付けて一體となる。戯曲的統一は、美的意識の統一を促がす底の統一より成るものであつて、そこでは受用の立場にある主體と、純粹産出に能動的に關與する純粹自我とが統一する。戯曲はこれらの統一化に外ならない。

實に戯曲は最高度の内面化を表示する。その内面化は、事件や體驗の獲得より、より以上に進みて、行動の統一、行動する主體の統一の獲得である。従つて吾々は次の

やうに言ふことが能きる。即ち、事件を獲得するものは叙事詩^{エポス}であり、體驗を獲得するものは抒情詩であり、行動の統一を獲得するものは戯曲である。尙その根柢にはこれらの文學類型を産出するものは内面化であり、内面化の方法若くは状態に應じて文學類型の別を發生せしめるものとコーエンは見てゐるのである。

此の三つの基本形態の外に、コーエンは尙、一種の文學類型の存在を考へてゐる。それは、傳奇小説^{ロマン}である。彼は傳奇小説を以つて叙事詩^{エポス}と抒情詩との混合形式であると見てゐる。彼によれば、抒情詩の體驗たる戀が、周圍の世界より乖離し孤立せる獨善の境遇にて相手との純情的交渉を續けるには、周圍の事情が餘りに煩雜となり文化が複雑化し、戀が周圍の事情によつて碍げられ、障礙に對して抗争し、こゝに文化生活上の一つの新たな生活價值となる。

かくして、戀の悩みと喜びとが顯著に現はれ、又戀と結婚の間のアンテイノミーも現はれる。この消息の文學的表現は傳奇小説である。コーエンの見る處では、傳奇小説は戀を取扱ふものであるが、併し、それは最早や抒情詩の如く單に戀の體驗の告白ではなく、戀が事件となり、その事件を叙述するものである。故に、傳奇小説は、その形式の點より言へば、叙事詩^{エポス}に繋がるものである、その素材の點では叙事詩より離れ

20 (op. Cit §15. Die zweite innere Sprachform und die Arten der Poesie)

十五

内面化の方法若くは状態が文學類型を産出する原因となるのは種々の内面化が、種々の内面世界を開拓し創造することを意味し、言葉によつて開拓し創造せられた内面世界は即ち文學なのである。コーエンは、内面化の種類によつて文學の類型を説いてゐるが、しかし、言葉の此の内面化に繋がる關係を明白にすることに氣づいてゐないのは遺憾である。文學の類型を産出する眞の原因は、この點に存すると思ふ。内面化の仕事は言葉に繋がる事柄である。さうして、内面化の仕事は言語の感情態を通してのみ爲されうるのである。吾々はこの言語の感情態に向つて注意を注がう。

かのコーエンが説いたやうな叙エルチエールンク述の發生法は、吾々の考へる言語の感情態に相當する。叙述が事件を産出すると言ふやうな彼の見方は、的確に言へば言語の或る感情態を通して生が或る状態に實現されるといふことに外ならない。

言語の感情態を通して内面化の仕事が爲されると言ふのは、世界が感情態を通して如何にながめられ、生が感情態を通して如何に取扱はれ、而してそれが如何なる状

態や形に於て實現されたかを意味するのである。而して元來、言語の感情態は世界のながめ方、生の取扱ひ方を規定しそれを要求する。語を換へて言へば、感情の言葉で語ることは、その事柄を自己感情に結付け自分のものとして取入れ自分の世界を組立てゝゐることである。かくして、言語の感情態は、モチーフと繋がるものであることが察知せられる。

言語の感情態は、その語られる事柄を動機づけ方向づけ、これを特殊な内面世界に迄形づくる。文學の内部機能としてのモチーフは、言語の感情態を通して活躍し、そのモチーフの種類は言語の感情態の種類と密接に關聯し、文學の類型別を産出する。吾々は言語の感情態として三個の基本態を挙げなければならぬ。第一に感情態が感情態らしく、感情的で、流露する状態が挙げられる。この場合、言葉は概して告白體を取る。さうしてこのものは一方位的なモチーフづけを取るに適はしい。

次で、この亢奮に傾ける言葉が、平穩な状態に移る場合が考へられる。それは事件を物語ることの興味が心を支配する時である。回顧的なる心状となり、事件の背後に感情が後退するや、穩かなる感情態が現はれ、徐ろに言葉は叙べられる状態となる。その時、言葉は概して叙述體若くは平叙體を取る。さうして二方位的なモチーフづ

けを取るに適はしい。

第一の場合に於て、感情態の言葉は直接的で、流露的狀態にある。第二の場合には、間接的で、反省的狀態にある。この二つは、セエシス 正と アンチセエシス 反に相當する。而して第三に、シエシス 合の狀態が考へられる。感情の言葉が綜合的狀態に立つ時、言葉は一面に於て事件を叙述しながら他面に於て告白する。さうして言葉は直ちに行動を産出する原因となり、行動への動機となつてゐる。

抒情詩の言葉に對し戯曲の言葉は、動機的であつて、それは常に動機を孕んでおり、行動へ進展すべき、若くは行動を惹起すべき性質を有するものである。抒情詩の言葉が、一方的なるモチーフづけにより、平叙的であるに對し、戯曲の言葉は、三方位的なるモチーフづけにより立體的である。

言語の感情態が流露的狀態にある抒情詩に於ては、概して一人稱的發言が適當であり、同じく反省的狀態にある叙事詩に於ては、三人稱的發言を取る傾向がある。言語の感情態が綜合的狀態にあるものに於ては、對話の形式を取ることを要求されてゐる。この場合言葉は對話體を取り、戯曲の本質はこの對話にある。

十六

感情の言葉は反省態となりて叙述力を得るやうになり、ゲーテが *Über epische und dramatische Dichtung* の中で説いてゐるやうに——聽者を落付かせ喜んで長く傾聽せしめる力を得、叙述する事柄に向つて聽者の關心を一方に偏せしめず、これを遍く一様に頷ち、餘りに印象の強烈なるものはこれに鈞合を與へ、事柄を自由に或は前方へ又は後方へ押し動かし、而してこの言葉を語るどころの作者その人はカーテンの後ろに隠れる、さう言ふ事情にあるのである。その結果、叙事詩的文學にありて語られる言葉は、語り手若くは發表の主體より游離してその言葉はインバルナルとなる傾向がある。

さうして事件の叙述といふことに向つて専らとなり、遂に客觀的描寫の域に迄達するのである。これは感情の言葉が反省態の状態にあり、その行程プロセスを逐へるものである。

感情の言葉は綜合態に立つとき、叙述される事件そのもの、中に發言の主體が求められ、感情の言葉に性格的基礎が與へられ、人物の性格より發せられる言葉となり、この性格に即ける言葉によつて事件の叙述がなされ、若くは動機を孕める言葉が會

話せられて事件を眼前に展開する。これ戯曲である。

戯曲の言葉はこのやうに事件を叙述する點に於て叙事詩に繋がり、人物が直接、感情の言葉を話す點に於て抒情詩的である。作者若くは作者の主観は、戯曲に於ては、叙事詩の場合と同じくインパーソナルな立場にあり、而も感情の言葉は叙事詩に於けるが如くその語り手より游離せず、直接、人物によつて發言せられるのである。さうして作者の主観は戯曲の人物に分身し、若くは各人物に投げ込まれ完全に、それぞれ、獨立せる人物となつて蘇生し、感情の言葉の主體となつてゐるのである。

戯曲にありて上述の方法により事件の叙述は總て人物の對話によりて、時には獨語を加へて、爲し遂げられる。叙事詩の中、小説の如きは、この方法を採用することもある。小説中の對話や獨語は、しかし乍ら戯曲のそれに比して、對話し獨語せる人物を尙未だ充分に性格化し、感情の言葉の主體たらしめ、獨立の、若くは立體的な人物となす程度に達してゐない。さうして又小説の中には部分的に挿入されてゐるに過ぎず、全部が對話より成る戯曲と、この點に於ても違つてゐる。

が、更に本質的に、言語の感情態上の相違を持つてゐる。小説中の對話は地の文を補足するために用ゐられ、説明的に使用され、言語の反省的なる感情態に屬する。之

に反し對話は戯曲の本質をなすものであり、言語の総合的な感情態に屬し、人間的意慾と行動を反映し導き出すものである。

戯曲を以てコーエンは行動の統一を獲得するものであると見てゐるが、それが言葉と如何に繋がつてゐるかに就いては少しも述べてゐないのは、文學の一類型としての戯曲を考察する上に大なる缺陷であらねばならぬ。

彼は戯曲を説くに舞臺と觀客との結合を説いてゐるが、それでは戯曲そのもの領域を越へて了つて演劇となつてゐるものを考察してゐるのだ。

戯曲の言葉は人物の性格より發せられる言葉である。さうして、それは對話を形づくり、對話に於て、言葉と言葉とが打ち合ひ、切りむすぶものである。戯曲の言葉そのものは行動である。

戯曲の言葉は、抒情の爲めにのべられ、抒情に終る底の言葉ではなく、よし抒情の爲めに用ゐられる場合でも、戯曲の言葉は必ず語る人物の性格に即しており、その置かれたる境遇を反映し、且つ身體的表情、身振り、動作に結付けるものである。總て戯曲の言葉は、動機であつて行動の夥しき可能性を胎藏せるものである。

この行動への進出力を持つてゐる言葉は、對話を通して強度化し、更に行動への可能性

を増し來る。これら戯曲的言葉によつて暗示され動機づけられた行動群は、コーエンの所謂道德的統一を豫備條件として一層高き立場に於て統一され、純粹感情の對象となるのである。戯曲は對話に於て現はれる行動の無限な可能性を統一するものである。

戯曲の言葉に含まれる行動への進出力は、實演的性質を有し、この性質が働いて戯曲を演劇に迄向はしめるのである。が、吾々は寧ろ言語そのものゝうちに潜在する行動に就いて戯曲の世界を考へなければならぬと思ふ。

十七

言語の感情態を通して如何に内面化が營まれたか、如何なる形に於て生が實現せられたか、そこに結成された文學類型の各の世界は如何なるものであるか、吾々は文學に就いて、客觀的に、又的確に、その構造形態の概觀を得たい願ひが切である。

ヴェルフリンによつて試みられた美術史的根概念の闡明の企ては、美術そのものゝ構造形態に就いて明瞭を缺ける吾々の概念を刷新する上に、如何に役立つたことであらう。吾々が文學の體系を考察するのも、亦一つはこの示唆に負ふものである。

言語の感情態は言葉の述べ方を規定するものである。それで、言語の感情態の中で、告白的な述べ方を取らせるものが數へられる。これは、一方位的なモチーフを取るに適はしいものであつて、抒情詩の世界を引き出すのである。

告白的述べ方と言つたのは、端的にして卒直な表白法の謂である。かゝる表白法を取らせる内面世界がある。それは抒情詩の世界であるが、この世界の性質に就いては、Carl qu. dird が言つてゐる「インネレ・ベゼールト・ハイテ」内に靈化されてあること、直接性を持つてゐること、そこには直観性アン・シヤウ・ユン・クワがあれば、性格は役割を演じてゐないこと、更に、それは、専ら主觀の把握方に依存すること (Prel.: Psychologie der Lyrik) 等は確實であり又、Gundolf が説いてゐる事物とその魂の祕密な運動體驗された運動が直ちに言葉となつてゐること、叙述された事柄固定化された事柄客觀化された心状や對象が抒情詩の本體を成すのではなくして、それは「ウシナイ・キエールリツ・ヘ・テツツルン」顫動と燃焼ブレンネンそのものにあると言ふこと、固定せる世界を流動し澎湃せる混沌の中へ押し流すこと (Gundolf: Goethe. Neue Lyrik.) 等が認められる。

従つてこの世界は流動的想像の働く世界であり、想像は言語表象を導いて心の流動感を作り出す。抒情詩の世界は流れる心の世界であり、流動的世界である。この

世界は感動の純なる状態にあり、感動そのものゝみを荷へるものである。それ故に、感歎の詞の如きは自から抒情詩的表白に伴ふのものであることが察知せられる。

次に、言語の感情態が、物語り叙述する述べ方を取らせるものがある。これは二方位的なモチーフを取るに適はしいものであるが、かゝる述べ方を取らせるものは、叙事詩の世界である。それでは、叙事詩の世界とは如何なるものであらうか。簡単に言へば、それは出来事の世界であり、歴史の世界である。

人間が、出来事を自己の精神に映し、これを歴史としてながめることの出来る文化の階梯に達して、叙事詩の世界は開ける。その出来事に對して、併し、個人は自己の自由意志によつてこれを牽制したり支配するやうなことは許されない。出来事が個人の意志の外に、それ自身の原因に基いて發展し展開するのを、ながめ、個人は寧ろ自身をその出来事の歴史の中へ入れてその中に於て動かされるのである。

出来事の世界に於ては、外界、自然、周囲の状態、環境、社會等が重大なる役割を演ずる。事件とは、人間の存在や生活がこれらのものと絡り纏れ合つて變轉し行くことを指して言ふのであるが、それは個人に向つて幸福を齎らすこともあれば又不幸を齎らすこともあり、孰れにしても、事件そのものは必然性を以つて展開する。

出來事、若くは事件の世界は、對立せるもの、世界であり、事情關聯の世界であり、個人の自由意志に對立せる堅牢なる世界である。それは謂はゞ客觀的に据えられ固定せる世界である。叙事詩の世界はかくして流動的なる抒情詩の世界に對立する。

叙事詩の世界には種々相がある。叙事詩とも言ふべきその原形、その外に、傳奇小説、小説(短篇小説)が即ちそれである。この三者は、その出現が歴史上に前後の關係を持つものど見ることが能きる。即ち最初に現はれたものは叙事詩であり、次で傳奇小説、最後に小説が起つたことが窺ひ知られる。

第一のものは神話に繋がりを持ち、人間が歴史の最初の階梯に入れる状態を現はしてゐる。叙事詩に於て出來事は超人間的である。最後の小説に於て出來事は全く人間的となる。これ人間的自覺の程度が鋭くなつた爲めであり、又外界に對する把握力や社會認識が力強くなつたのに基因する。傳奇小説は兩者の中間に位する。傳奇小説に於て出來事は半ば超人間的であり半ば人間的である。

叙事詩の世界は物語り叙述することを要求する。それは何故であるかと言ふに、物語り叙述することは、この場合、解釋することでありその由來や意味を説明することである。出來事は既に知つた如く、事情の關聯であり、周圍や環境や社會が人間に

絡り合へるものである。

その錯綜し不明なる事柄に脈絡をつけ因果の糸をたぐることは事件を物語ることであり、事件の叙述は事件の中に秘める隠れた事情や心理を明にし説明することである。

事件を物語ることは、又、既にありし事件若くは過ぎた出来事を物語ることであり、この意味で回顧することである。若くは、又それは事件を回顧しその事件を解釋することである。

既にありし事件を物語ることは歴史であるが叙事詩は又歴史でもある。それと共に、將來あるべき事件や起りうるであらう出来事に就いて物語ることも可能であり、事件をひき起す錯綜せる因果の糸を將來に向けて展開することも可能である。この事をも小説はなしうるのである。

且つ又、叙事詩的文學一般に想像力が作用する。物語りや叙述を充分に爲し遂げらるには、想像の力を借らなければならぬ。事件の叙述は、あるべき又は起りうるであらう出来事の因果の糸を展開する上に、想像力の助けによつて、叙述を具象化し描寫を完くすることが能きる。

描寫的文學たる小説は、更に、一種の“Perspective”を有するものである。さうして、小説的述べ方は、叙事詩や傳奇小説の述べ方とは違つて、一層緊張したものでなくてはならぬ。さうして小説的述べ方には所謂“Pointe”が必要である。

十八

言語の感情態が、對話的な述べ方を取らせるものがある。これは三方位的なモチーフづけを取るに適はしいものであり、かゝる述べ方を必要とするものは戯曲の世界である。戯曲の世界は、行動の世界である。

行動の世界は事件の世界と密接な繋がりを持つてゐる。事件の世界にありて、事件そのものは吾々の前面に擴がつており、個人は、事件の大きな波に翻弄せられ、事件の全體の動きの合間々々に個人の姿を隠見させるに過ぎない。然るに行動の世界は個人を引き上げ事件の大なる渦卷に立ち向はせるのである。

叙事詩の世界にあつて、事件が全體であり、個人はその一部に取り入れられてゐたが、戯曲の世界にありて、個人は前面に立ちて現はれ、彼はその行動を以つて、直ちに事件の中に躍り込むのである。

事件の世界に於て、事件はそれ自らの原因に基き必然の道を取つて發展し展開する。それは全く個人の意志の外に於てゐる。行動の世界に於ては行動が中心生命である。行動は、事件を惹き起し若くは事件の進展と衝突し、そこに葛藤が現はれる。而して、行動は意志と關係なしではありえない。行動には責任がなければならぬ。

叙事詩の世界には事件の錯綜紛糾はあるが、それは葛藤とは言へぬ。葛藤は個人の意志に關係する。個人の意志が全體の事件と衝突する時に葛藤は生じる。戯曲の世界の於て葛藤は中心生命である。

戯曲は葛藤の必然的なる展開である。

而して、葛藤は遂に解決されなければならぬ。葛藤とその解決の方法に二大別がある。悲劇のそれと、喜劇のそれとである。戯曲の世界の二つの領域である。吾々はこれを細論する暇を持たない。

行動の世界と對話に就いて一言しなければならぬ。事件の世界は叙述によつて、事件の真相を闡明にすることが能きる。行動の世界は、個人が行動を以つて事件を惹起し若くは事件と衝突する世界であつて、廣義に解した事件の世界である。それ

故に、矢張り叙述せられ、その事件の紛糾が眼前に解かれることを必要とする。

而して叙述そのものは、具象化を望むとき對話の方法を取る傾向を持つ。既に小説には此の傾向が現はれてゐる。而して對話體の叙述は、事件を結果より遡り回顧して展開するものではなく、事件を眼前に原因より展開せしめるものであり、行動そのものど直ちに結付いてゐる。戯曲の世界が對話によつて述べられることを要求するものも亦一つは此の理由による。

吾々はこれ迄、流れる心の世界としての抒情詩の世界、事件の世界としての叙事詩の世界、及び行動の世界としての戯曲の世界を見定めることができた。さうして、これらの世界より、抒情的告白體、叙事詩的叙述體、及び戯曲的對話體がそれに繋がり、それら、抒情詩、叙事詩、戯曲を形づくつてゐるものと見られる。これは、文學類型で正醇態である。が、時には抒情詩の世界が告白體を取らずに對話體を取ることもあり、叙事詩の世界が告白體を取る場合、その他これに準じ文學類型の特殊態の發生は考られないこともなく、又許されぬこともない。(完)